

《会報ふくしま》 電子版第62号

福島県土地家屋調査士会 24.1.20 発行

# 目次

---

- 1 会長あいさつ
  - 2 支部だより
  - 3 隨筆（会津・佐藤会員、相双・新道会員）
  - 4 会員異動
  - 5 お知らせ
  - 6 編集後記



### 1) 会長あいさつ

## 會長 五十嵐 欽哉

福島県土地家屋調査士会会員の皆様、ご家族の皆様、新年あけましておめでとうございます。この新春は、おめでとうという言葉を使うことがためらわれますが、やはり新春は気持ちが一新するものであり、おめでとうという言葉がしっくりしますので使わせていただきたいと思います。

この挨拶文は、1月9日夕刻に書いております。8日と9日には、各地で成人式が行われ、それらの記事や映像が報道されております。被災地の新成人達の逞しいことに勇気づけられる思いがします。震災後、各地を支援に廻っていた方の話を聞いたのですが、「子供達は大丈夫だ、目に輝きを取り戻している。でも、大人がみんな元気がない、笑う力も失っている。」と言っていたのを思い出します。子供達は、新成人達は、柔軟でエネルギーです。それが若さという力なのでしょう。新成人達の言葉や表情を見ていると、おじさんも頑張れよと言われているような気がします。会員の皆様も復興支援の業務に忙しいことと思いますが、二十歳のころの自分を思い出して、新たな時代への希望を描く新年であることを願っております。皆様が行っている復興支援の業務は、福島の復興のスタートとなる事業、もしかするとスタートラインに立つための準備の事業かもしれません。長い道のりになるでしょうが、箱根駅伝の東洋大チームのように、調査士同士がチームとなって挑戦する事業だと考えております。

2012年が、福島にとっての復興元年になるとこと、調査士及びその家族の皆様にとって震災前のような生活へ向かって歩み始める年となることを願いまして、新年の挨拶といたします。



## 2) 支部だより

### ◇ 福島支部 ◇

#### 『福島支部の支部旅行に参加して』

福島支部 川瀬重則

新年おめでとうございます。

昨年は大変な一年でした。福島支部の会員も被害を受けて事務所が崩壊した人や義父母が津波でさらわれ行方不明になった人もおりました。また原発事故の放射能から逃れるため家族が県外へ避難している方もいて散々な一年がありました。

震災から6ヶ月が経ち一段落したころ、福島支部から支部旅行の案内がありました。気分転換の意味も含めて今回も参加する事にしました。支部の旅行といえば我が支部の旅行は観光会社のツアーで行くのが定番となっていて、他の一般の方々と一緒に旅行に行きます。

今回は旅行委員の三浦副支部長のご苦労により平成23年10月8日（土）に秋田の田沢湖畔の秋田グルメ祭り、パワースポット・御座石神社、角館にある武家屋敷などを見学する読売観光企画のツアーに参加しました。三浦副支部長のほか菊池支部長、八巻さん御夫妻、常連の菅野ヨシ子さん、加藤幸雄さん、橋本祐司さん、橋本豊彦さん、千葉洋之さん、そして支部職員の佐藤智子さんも参加して皆さん日頃の行いが良い？ので、お天気にめぐまれ、また高速道路の無料化で渋滞するのでは思っていましたが予定時間の30分遅れぐらいで、快適で大変たのしく思い出が残る旅行となりました。

いつもですと自称無口な（私から見ると口が六つあるかと思うほどおしゃべりな）Sさんが参加するのですが、今回は出発直前都合が悪くなってしまったが、いつもよりは静かな車内でしたが、それでも三浦副支部長から缶ビールとつまみが配られてアルコールがまわると大変なにぎやかさでした。とくに支部長とHさんはアルコールを飲むペースが速く、自分でウイスキーなどを準備し足りなくなっては買い足して、仕事の話や旅行にいった時の話などを楽しそうに大声で話をしております。

こんな状態ですから毎年一般参加のお客さんにはご迷惑をお掛けしています。箱根旅行ではKさんが迷子になって大騒ぎ、筑波山旅行ではHさんが酔いすぎて車内でグロッパキ、今年は・・・やはり伝説ができてしまいました。帰りのバスの中、今まで大声で話しをしていた支部長が急に静かになったなと思ったら、「お腹が痛い」と蚊のなくような声でいうのです。今までの勢いとの落

差に思わず笑ってしまいましたが、バスは停車予定のないコンビニで10分間ほど停車する事になりご迷惑をお掛けしました。その後はすぐにまた元気な支部長に戻りましたが、みんなからひやかされていました。

さて秋田グルメ祭りは田沢湖畔にある田沢湖レストハウスの駐車場で行われていました。とてもかわいいあきた犬が私たちを出迎えてくれました。



ガイドさんから渡された600円の昼食券を片手に露天の屋台を回ります。横手焼きそばはB1グランプリで優勝した事があるそうで、一番人気でした。神代カレーも中々健闘していました。その他きりたんぽ、稲庭うどん、比内地鶏の焼き鳥など秋田の名産品を食してきました。皆さん600円では足りず買い足していました。どれもおいしかったですね。

次にまわったのはパワースポット・御座石神社で、ガイドさんの説明では田沢湖の湖神でもある辰子姫を祀る神社との事でした。青い湖面と赤い鳥居のコントラストが印象的でした。



また武家屋敷の「石黒家」の内部を見学しました。欄間はケヤキの一枚板だそうで、亀がすかし彫りで彫ってありました。明かりで照らすと、隣の部屋にその姿が映し出されるというわけです。風流ですね。現代の和風建築でも使えそうな仕組みだと思います。現在も住みながら、維持・保存しているそうで内部を案内してくれたおねえさんの説明がたいへん流暢で印象に残りました。後日インターネットで調べたら「石黒家」の内部のパノラマ映像がありましたので興味のある方は見てください。

最後にもろこし製造工場に立ち寄り見学しました。真心を込めた手仕事を見ることが出来ましたが、ヨシ子さんはもろこしがよほど気に入ったのかそれを横目に試食のもろこしをバクバク食べていました。皆さんもここぞとばかりお土産を買い込んでいました。

午後9時頃福島駅に無事到着して解散しましたが、今回は旅行の行程に温泉がなかったので私だけ福島駅の極楽湯に入ってから帰宅しました。旅行の続きのようでこれもまた格別でした。今年の旅行にはぜひ温泉も入れて欲しいと思います。支部の皆さんお疲れさまでした。また参加したいと思います。たのしみにしています。

※福島市内は線量が常に0.4ぐらいあるので、秋田のような原発事故による放射能の影響の無

御座石神社という社名は、慶安3年(1650年)に秋田藩主佐竹義隆公が田沢湖を遊覧した際、腰をかけて休んだことに由来するそうです。女性的なやわらかいエネルギーで気分がリフレッシュされるのを感じられました。そして仙北市の角館「みちのくの小京都」では、藩政時代の城下町の様子を今も残していて、まるで江戸時代に戻ったような錯覚を覚えました。紅葉が始まりかけた武家屋敷をヨシ子さん、智子さん達と散策してとても気持ちが良かったです。



い場所に線量計を持っていって通常の値は本当に0.04がなのか確認したかったな・・・支部にある線量計を持っていく事に誰も気付かず帰つてから気付きました。

## ◇ 郡山支部 ◇

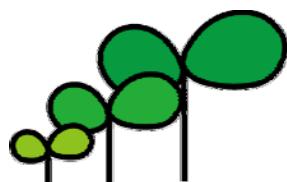
## 『無料登記相談会について』

郡山支部 景山宏喜

郡山支部主催の無料登記相談会を10月1日にイトーヨーカドー郡山店で行いました。また今年は福島地方法務局との共催で行い、かつ福島県司法書士会郡山支部主催無料法律相談会との同時開催で行いました。

この相談会は、毎年開催しておりますが例年相談件数が1～2件と少なく今年は東日本大震災等があり悩んでいる方々が多くいるのではないかと理事会で意見が出されました。相談会開催の広報活動を例年は行っていませんでしたが、今年は新聞社への挨拶・ポスターを作成し官公署や銀行等での掲示・ポケットティッシュを1000個会場入り口で配布等の活動を行った結果、10件の相談件数がありました。主な相談内容は下記のとおりです。

- ・ 損傷した塀の建て直しによる境界未立会での越境構築
  - ・ 地震による損傷での建物取壊しの是非
  - ・ 現時点での損傷はないものの今後の余震による被害の未然防護
  - ・ 以前土地を取得したが分筆、所有権移転登記等の手続をしていない
  - ・ 分筆登記の費用
  - ・ 境界は確認したが越境構築物の取壊しについての是非



地震による境界への影響、自分の財産を保全する必要性及び対費用効果等市民の多くがどうしたらよいのか心配している部分を感じられました。支部の予算関係上無料相談会は年1回しか開催できないのが現状です。東日本大震災の影響による復興・復旧事業では、我々土地家屋調査士の業務は土台造りでありそこを誤ると適正なインフラ整備ができないと思います。市民の心配ごとは待ってもらえるものではなく、土地家屋調査士制度発足50年強が経ち組織として社会貢献するには長期・中期・短期計画が必要で不可欠と再認識しました。

◇ 会 津 支 部 ◇

『災い転じて・・・』

会津支部 五十嵐 一夫

「新年明けましておめでとう」と言いたいところですが、今年は昨年の大震災とその後の原発・放射能対策で、おめでとうということや年賀状等の挨拶をためらっている方がいらっしゃいます。それは思いやりや、個々の考え方がありますので、私は深く捉われず、素直に新年ですので「おめでとう」で参ります。

会津では年末からの豪雪による、交通の遮断・建物や農業施設災害、震災による建物の倒壊や被害、震災後の混乱による経済の停滞、放射能対策、7月の新潟・福島豪雨による家屋の流失、道路・鉄道の寸断、停電、断水などがあり、戦争を経験したことのない、福島県内の私を含めた世代以降の方にとっては、人生経験で最大の激動の年ではなかつたのではないかでしょうか。

今年は辰年、災いを絶つ（タツ）年となるよう期待をします、大変な不安を与えた年から、今年は福島県民も我々調査士も調査会も、生活が安寧に、また地域経済が向上し、成り立つ（タツ）よう願うものです。

私は、常々 災いというものが福島県にどんなことをもたらしたかを考えると、将来に福となした大きな事例あります。

戊辰戦争、会津は賊軍として戦い敗れました、白虎隊の悲劇がありますが、それ以来賊軍の汚名で会津の人は生きてきました。しかし、それがあったから会津若松市の観光があるのです、同じ賊軍でも同等に戦った地域からは、会津が幕末の悲劇を独り占めにして、利用して、羨ましく思っている方もいるのではないでしょうか。

磐梯山の噴火、大爆発により磐梯山周辺には大災害で、相当な死者があり、噴石・土石流などにより、日本ではまれに見る地形の大変動をきました。それから年月を経て、裏磐梯は自然の回復により、湖沼群をともなった一大景勝地となりました。今や磐梯山周辺は日本の有数の観光地であり、福島県の代名詞でもあります。

災い転じて福となす、今日・明日のうちには無理かもしません、しかし福島県民は過去の悲劇・災いを福となしているのです、昨年から続いている災いを福となすべく、国・県の施策や個々の取り組みを期待します、その時点では悲劇・災いであっても、我々の孫子においてはこの災いが災いではなく、福となすよう努めましょう。

我々調査士も復興には大きな関わりを持つ職能集団です、土地の境界の復元、土地の開発・測量、建物の新規需要の増大など国民・県民・地域のために役立つ（タツ）ように、奮い立つ（タツ）、起ち（タツ）あがる年でありますようにと祈念します。

## ◇ 白河支部 ◇

## 『支部運営について』

白河支部長 佐藤芳則

東日本大震災から10ヶ月が過ぎ、未だに厳しい状況が続いております。特に福島県は、原子力事故というきわめて深刻な問題を抱えており、復興には長い時間と多額の費用、そして各個人の協力が必要であると考えます。

長い道のりではありますが、一步一步着実に歩んで行く事が重要であると思います。

さて、現在白河支部には、38名の会員が在籍しておりますが、存続の危機が迫っております。当会員は、白河支局と須賀川出張所の区域内に事務所を有しております、今回郡山支局新庁舎建設に伴い須賀川出張所が統合される計画が発表され激震が走りました。時代の流れとはいっても長年一緒に活動してきただけに複雑な思いであります。

平成22年10月29日から30日の二日間に新甲子温泉（五峰荘）を会場として支部連絡協議会が開催され、議題は「支部組織の見直しに関する調査研究について」として協議いたしました。県内6支部設置されておりますが、半数の支部が会員数減少のため厳しい運営に迫られております。この協議会は、各支部の実情を理解し、有意義な会議となりました。支部組織改革の必要性を認識しながら多くの問題点を今後検討していくことで終了いたしました。この問題は、白河支部だけでなく、すべての支部、更には全国の単位会でも同様であると思います。

今後、多くの問題を一つ一つ解決しながら将来を踏まえた改革が必要な時期に来ていると実感いたしました。引き続き活発な意見を出していただきて議論を深め、より良い支部改革が実現出来ますよう、共に取り組んでいきたいと思います。

## ◇いわき支部◇

## 『放射性物質と共に暮らす』

いわき支部 大森 仁

激動の2011年が過ぎゆき、2012年がやって参りました。あの震災からもうすぐ一年、長かったような、あつという間だったような複雑な心境です。ただ、福島第一原子力発電所の事故があつたせいか未だに復興の道程に入ることなく災害の只中にある気がいたします。

文部科学省の平成23年12月の発表によると、我が福島県には、宮城、福島を除く45都道府県の積算値の合計値（14万4446ベクレル）の47倍の放射性物質が降り注いだとのこと（圧倒的じゃないか我が軍は・・・）。とても威張れるたぐいの話ではありませんが、いざ数字をつきつけられると、間違いなく汚染された土地に居住しているということを実感せずに居られません。

そんな中、やはり「一家に一台持っていて良かった」というのが個人線量計であります。一時は本来の売価に対してかなり高額で取引されていた線量計ですが、ここに来て大分価格が落ち着いて参りました。ただ、いざ購入しようと考えても、種類の多さや値段の多少に何を仕入れて良いのか迷う所です。

ここでは、私が個人的に調べたなかで、現在購入可能で、使い勝手のよさそうな機種を幾つかご紹介したいと思います。値段は平成23年12月現在の大体の価格です。これから購入を検討されている皆様の参考になれば幸いです。未だに法外な値段で売買している通販サイトなども見受けられます。是非下記の相場価格を参考に「引っかかるない」ようにしていただければと思います。

まず、一口に線量計と言っても測定方式の違いによる得手不得手があります。具体的な機種を上げる前に、簡単に一般的な測定方式による差を説明したいと思います。

### ◆GM（ガイガーミューラー）管方式

GM 管を用い、放射線数をカウントし、線量を表示する。 $\alpha$  (一部機種)・ $\beta$ ・ $\gamma$  すべての放射線をカウントするため汚染箇所を見つけるのに適している反面、 $\gamma$  線のみを考慮すべき空間線量に誤差が出やすい ( $\beta$  線を捉えることで数値が大きくなることがある)。

#### ◆シンチレーション方式

放射線を受けると光るシンチレーションという検出器を用い検出する。基本的に $\gamma$ 線のみに反応するため空間線量の値が正確で、かつ故障しにくい。表面汚染探索には向かない。

◆その他

S i 半導体方式・フォトダイオード方式等電子的なものや Ge 半導体方式等高感度な食品測定用の機種など様々です。安くてコンパクトなものから高級車と同額のものと、ピンからキリまであります。現在、個人線量計としては GM 管方式とシンチレーション方式が一般的に流通しております。

では、ここから機種のご紹介です。あくまで個人的感想であることをお含み置きください。

□PA1000-RADI (日本製)

シンチレーション方式。TV ニュースにもよく登場します。空間線量のみ測るのであればコレが最もおすすめ。11万前後。

□DoseRAE2 (アメリカ製)

シンチレーション方式。反応は遅いが空間線量の数値は概ね正確。PC にログの記録可能。小型軽量名刺サイズ。静電気や衝撃などによる誤作動が欠点。3万前後。

□Inspector+ 又は Inspector Alert (アメリカ製)

パンケーキ型 GM 管。一定時間内のカウント機能があり微量の線量差を判断できる。また、GM 管方式の中ではかなり感度が高いため表面汚染探索に最適。反面連続した空間線量測定には向き。8万前後。

□RADEX1008 (ロシア製)

パンケーキ型 GM 管 × 2。Inspector より感度は劣るが  $\beta$  線単体線量の表示が可能。表面汚染探索向き。6万前後。

□RADEX1503 又は 1706 (ロシア製)

GM 管方式。一番出回っていると思われる。使用方法がシンプル。精度は普通。1503 は最近値崩れがひどく、一時期 8 万円以上していたが現在は 1.5 万円程度。1706 は同じ GM 管を 2 本積んでおり測定時間・精度が高い。3.5 万円前後。

□TERRA MKS-05 (ウクライナ製)

GM 管方式。管自体の性能は SOEKS01M や RADEX1503 のような廉価版と同等だが内部処理が非常に良くできているため空間線量を安定して表示できるほか積算線量の記録や PC との連動なども可能な万能機。6 万円前後。

□エアカウンター (日本製)

S i 半導体方式。最近発売。5 分間計測した平均値を表示する機能のみ。数値のばらつきはあるが安価。とりあえず空間線量を測りたいというならこれでも十分。発売間もないが新型が出るという噂有り。別名たまごっち。9800 円。

事故前には非日常であったことを今後は日常とせざるを得ない我々としては、リスク管理を続けることが必要だと思います。「0」にするのは無理だとしても、外部・内部どちらも被曝は最小限とすべきでしょう。

慣れすぎず、さりとて怖がりすぎることなく放射性物質にたち向かって参りましょう。

## ◆ 相 双 支 部 ◆

## 『あの時の私、あれからの相双支部』

## 相双支部長 佐藤 裕行

この「会報ふくしま」を会員が読む頃は東日本大震災から10ヶ月が過ぎています。まだ収束しない東京電力福島第一原子力発電所の事故が相双支部をより困難にしています。

初めに、私が体験したあの時を振り返って見たいと思います。

3月11日午後2時46分。あの時、私は福島地方法務局相馬支局で閉鎖地図の写しをしていました。突然ものすごい揺れを感じ、ペンを置き数秒じつとしていましたが揺れは収まるどころか、さらに強烈な揺れが続き、これは普通の地震ではないと思ったとき、窓口の受付の人が「ヘルメットはカウンターの下にあるよ」と教えてくれたので、ヘルメットをかぶり床にしゃがみこみました。地震は収まるどころかますます激しくなってきました。そのとき、登記官が「早く、外に逃げろ」と叫んで自動ドアを手で押させてくれたので、みんなで外に逃げ地面にしゃがみこみました。すぐに、家族には電話もメールをしても通じなく、とにかく早く帰らなければと思った。揺れが収まった時、筆記用具を片付けに戻り、片付けていたら2回目の地震ありあわてて外に逃げ、また揺れが収まった時に道具片付け、やっと帰る準備ができ、法務局のみんなに「気をつけて」といわれながら自宅（兼事務所）に戻りました。家族はケガもなく無事であることを確認し、ほっとしました。また、自宅も被害はなかったが事務所にあるパソコン・プリンターは落ち、書類が散乱していて思わず力が抜けてしました。

その後、巨大津波のテレビ映像に驚き、妻の実家と連絡が取れず、不安がピークのとき電話があって、「家は津波にやられたが、レスキュー隊に助けられ、今は病院にいるが大丈夫である」それを聞いてほっとしました。

その夜は余震が何度もあり眠れなかった。

次の日、東京電力福島第一原子力発電所で1号機水素爆発その後、3号機・4号機・2号機の爆発。私たち家族は避難することを決め、3月15日喜多方市にいる親戚宅に避難。初め、避難は3・4日くらいで長くても1週間と思っていました（その家の家族も含め18人で生活）。10日が過ぎた頃、南相馬市に残っている親戚・知人・友達と連絡を取り、戻ってもなんとか生活できると聞いたので私は3月下旬に一時帰宅。それから、喜多方に行ったり、戻ったりして自宅で過ごす。その頃の状況は、コンビニはもちろんスーパーも開いてはいませんでした。支援物資や相馬市にあるスーパーに買出しに行きました。たぶん、ほとんどの人も同じだったと思います。今、自宅（兼事務所）は少し放射線が高い（南相馬市災害対策本部による放射線モニタリングは庭先1m高さで $1.0 \mu\text{S V/h}$ ）ですが頑張って生活しています。

ここからは相双支部の話をします。このように、東京電力福島第一原子力発電所の事故により支部の会員はほとんど避難していました。当初、支部総会の開催はもちろんできる状況とは思われませんでしたし、支部そのものの存続さえ危ぶまれていました。しかし、来年度の支部を運営するために予算案の作成・支部役員や本会の理事の推薦など決めなくてはならないことがありました。

当時、私は副支部長でしたが支部事務所のある南相馬市原町区に戻っていましたので、本会の柴山会長（当時）・坂本支部長や支部役員と連絡を取り、支部総会を開催することをきめました。そして、4月23日支部理事会を開催し5月12日に当支部事務所（緊急時避難準備区域内であったが）で開催することに決定しました。その後、庶務担当の柄窪理事と避難している支部会員（会員数32名中、避難会員16名の避難場所は東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・京都市・秋田県・仙台市・山形市・いわき市・福島市などでした）に連絡を取り、避難先の住所に総会資料や委任状を送付しました。平成23年5月12日、支部事務所で柴山会長ご臨席の中、支部総会を開催しました。支部研修会の廃止、予算の削減、支部役員の削減等を決めました。（本人出席17名・委任状出席15名）そこで、私は支部長になりましたが、まだ収束しない東京電力福島第一原子力発電所の事故の中、支部をどのようにしたら良いか支部の全会員にアンケートをとることを決め、7月にアンケートを送付しました。その結果、事件数はゼロ又はほとんどゼロに近く、業務に関して、避難している会員はもとに戻り、事務所を再開したいでした。たぶん、それは今も変わらないと思います。その後の支部は、戻っている約半分の会員で「東日本大震災による倒壊等建物の滅失調査」や相馬市・南相馬市の要請で独立行政法人国民生活センターから「震災被災地への専門家派遣事業」の依頼があった被災者の相談業務を行っています。

最後に、本会からの励まし、見舞金・会費の免除・支援物資などをいただき相双支部を代表して心から厚く御礼申しあげます。(支援物資は支部総会で出席会員に配り、大変喜ばれました) これから支部は、警戒区域の見直しや除染の結果により、今後どのようになるかわかりません。支部としてもあと2・3ヶ月の間に相双支部の今後のあり方を考えなければなりません。

一日も早く復興すること願っています。

### 3) 隨筆

## 『倫理綱領と土地家屋調査士』

会津支部 佐藤一男

昨年の11月に、親父の13回忌の法要を営んだ。法事ふるまいの席上、和尚の説法が始まった。「津波で被災した人々、命を絶たれた人々、本当にあってはならない出来事に、ただただ祈るばかりです。しかし、現地で許せなかったことは、仏になりしご遺体を目にしたときです。手を組んで静かに眠るご遺体の片方の手には、何故か真っ白い手袋が被せられ、遺体安置所に連綿と続く光景に、鳥肌が立ち、身が震え、怒りがこみ上げ、涙がとめどなく流れたことです・・・」。意外な話に、ビックリした。誰の仕業かわからないが、遺体を損傷させてまで指輪などの金品強奪という卑劣な行為を、この震災のドサクサにまぎれておこなった輩がいたことが分かった。咄嗟に、仙台から法事に来た姉が、「震災当時、地震や津波で内陸部へ避難する沢山の被災者がいる一方、同じく沢山の得体のしれない集団が、逆に被災地へ向かったということを耳にしている」といったので、この事件の真相が見えた気がした。

外国メディアが、「震災でもマナーがよい日本人」と盛んに称賛報道をしていたが、「ちょっと待

って下さい」といいたい。なぜなら、この極悪非道の犯罪行為を、もし日本人が犯人だとしたら、許されないどころか“サムライの国”的滅亡を暗示し、かりに外国人の犯罪なら国土安全保障政策を徹底的に見直すというより、治安維持の総点検を迫られよう。経済大国で先進国という日本国にあって、“恥ずかしい”的一言に尽きる。たとえ震災といえどもこのような無法状態を野放しにすることはできない。この異常とも思われる犯罪行為に対する真相究明をしない限り、震災からの復旧・復興などは到底望めないであろう。自由と民主主義の法治国家である日本にあって、当然、司法当局も捜査をしていると考えられるが、何故かこのような卑劣な犯罪事件をマスコミが一切報道しないことが不思議でならない。別段、この一件に関して政府批判をするわけではないが、それより、なにより“仏がうかばれない”であろう。この一点で、犯罪捜査に縁もゆかりもない調査士だが、法務行政の一翼を担う資格者である以上、見過ごすことはできない、と思うのは私一人なのだろうか？

最近、都合の悪い出来事は敢えて一切報道せず、どうでもよい韓流ニュースや極端に不安を煽るニュースを報道するマスコミの姿勢に憤りを隠せない。「どうでもいい韓流ニュース」というと、“差別だ”“偏見だ”などとバッシングを受けるのも日本の風潮で、「本当にここは日本国なのか」と疑いたくなる。ひょっとすると、この会報が出た時には「調査士を辞める破目になっているのでは」と恐ろしくなるのも事実。その時は、皆さん“さようなら”。そういえば、韓流批判をしただけでフジテレビから干されたタレントやニュースキャスターがいたが、異常である。この異常な出来事に対するデモまで発生したものだから、今度はお笑いタレントの岡村隆などが「韓流がいやならテレビを見るな」と、逆に韓流擁護発言をしたことから、ドイツの放送局に「日本では韓流を擁護するフジテレビの偏向報道に大規模なデモが勃発」と報じられ、「日本のテレビ局によるこの言論弾圧は中国や北朝鮮を想起させるものだ」と痛烈に批判された。さらに名古屋のフジ系列局で、岩手県産米の“ひとめぼれ”を「怪しいお米セシウムさん」と放射能汚染米の如く報道したこと、「金で外国のプロパガンダを垂れ流すフジテレビ」に対して多くの日本人が激怒している」とタタかれた。諸外国のメディアにここまでいわれているのであるから、日本も地に落ちたもので、日本人そのものの倫理観が全く機能しなくなっているのではないか、と思うばかりである。

ところで、原発事故の被災者となった会員の方々も多く、言葉に言い表せない思いでいっぱいである。それでも昨年12月16日、福島原発の冷温停止状態とともに事故完全収束宣言が政府から発表されたので、ようやく故郷へ戻れると、安堵した。しかし、妙なことに“冷温停止状態になっても帰れない”との報道に、正直、唖然とした。もっとも、チェリノブイリ級のレベル7でメルトダウンを起こした原発と報じられている以上、冷温停止などあり得ないと思っていた矢先の発表だけに、ますます原発事故の真偽のほどを疑った。なぜなら、そもそもメルトダウンとは「燃料棒が融解して圧力容器の底に溜まり再臨界し、圧力容器を突き抜け、そして格納容器も突き抜け、さらに建屋コンクリートも突き抜け地下に侵食する状態」というのが私の知るところであり、少なくとも半径400km範囲は“死の街”と化すのが当然だからである。当然、会津地方は全滅である。喜多方ラーメンをすすっている場合ではない。なのに、冷温停止なのである。もし、“コアメルト”（炉心内で燃料棒が融解すること）レベルだったなら、冷温停止もあり得るのだが、と勘織り

たくなる。推理小説ではないが、当初からメルトダウンではなくコアメルト状態であったが、これでは反原発運動まで持つていけないとして、何が何でも危険なメルトダウンを演出したかったのでは、と探偵ごっこをしたくなる。もしそうだとしたら、マスコミも、日本の「お偉い方々」も許すわけにはいかない。

この冷温停止発表も不思議だが、原発事故の処理自体にも疑問を呈したい。事故後まもなくニュースで、海自護衛艦が被災地に急行することを知った。この時点で、急きよこの護衛艦に搭載されている GPS 装置を出動前に点検する必要が生じ、この時、作業に入った GPS メーカー筋が自衛隊関係者から聞いた話によると、アメリカ海軍の原潜が 4 つの冷却装置を積んで横須賀に入港していたという。この話しが本当なら、一部の新聞で、東電が真水による冷却をおこなう計画が報じられていたが、この原潜入港がその裏付けの事実として一致しないでもない。また、一部週刊誌やマスコミなどで、「首相がアメリカの原発事故援助を断る」というニュースが流れたが、もしかしてせっかく積んできたアメリカの冷却装置を断ったのが真相ではないか、と思いをめぐらしてみた。つまり、当初は、原発に海水を注入する計画ではなく、真水による冷却を進めていたことになる。しかも、真水で事故が収束したのでは、とまた勘織りたくなる。あるいは、真水を注入して、ダメなら海水という段階的な手段も十分考えられたのではないか、と探りを入れたくなる。とにかく謎である。謎というより、もしこれが事実なら、真水の注入により原発事故の早期終息、早期避難解除が実現したのではないか、とまたまた勘織りたくなる。冷温停止発表もいいが、指導的立場にある「お偉い方々」は己の倫理観に照らし合わせて、少なくともその事実関係の経緯など、我々国民の前にきちんと説明すべきである。

もう一つ、放射線関係報道の“異常ぶり”には、正直、ウンザリする。ある程度の放射線に関する知識がある人からすれば、たった数  $\mu\text{Sv}$  なのに「異常に高い放射線量を検出」「癌になる」などと連日連夜、今でも報道されていたのではまともな人でも洗脳されてしまう、と考えたくもなる。当時、テレビ朝日の TV タックルで元自衛官の大学教授が「すでに陸上自衛隊が原発周囲から想定されるすべての地域まで戦略的に設置した放射線量測定器があり、これらのデータはリアルタイムで首相官邸まで届いているはずだからそのデータを発表すればよい」と盛んにいっていたにもかかわらず、未だに自衛隊のデータが発表されていない。あまりにも高いから発表しないのか、あるいはあまりにも低くて話にならないので発表しないのか、謎である。しかも、そのうち自治体が測定したデータとはいいがたい、もしかしてどこかの市民団体のおばちゃんが測定したデータをもって、高い、高いとなってしまったのでは、とまた勘織りたくなる。事実、あの放射線量は一体誰が最初に測定したのか、今でも謎である。

謎は謎を呼び、さらに謎が生まれる。“白カッパ”を着て、復旧作業をしている方々の映像をテレビでよく目にするが、「高い、高い、ガンになる」という放射線から身を守っているのか、と心配になる。なぜなら、私の知る限りでは放射線の正体が電磁波であるという理由からだ。同じ電磁波である携帯電話の電波や光と比べて、ビームスポットが極めて小さく、これまた私の知る限りでは鉛以外に放射線電磁波を遮断することはできない。つまり、放射線はほとんどの物質をいとも簡単に通過する。もし本当に高い放射線量が出ているなら、秒速 30 万 km の速度で確実に悪さをする。

“白カッパ”が日本初の鉛に代わる放射線を遮へいするハイテク服なら別だが、そうではないなら大変なことになる。マスコミが放射線は危険だ、ガンになるとやみくもに流す一方で、“白カッパ”を着れば放射能から身を守れるような錯覚を招く報道は犯罪行為そのものであろう。事実、お母さんが、我が子を放射能から身を守るために、真夏にもかかわらず、マスクと雨ガッパを着せて、これで大丈夫として、涙ながらに訴えている場面をテレビで拝見した時、放射線の正体である電磁波のことを、本当に知っているのかとキノドクになった。

それでも白カッパを着て平気で作業している光景を幾度となくテレビで拝見すると、もしかして、この恐ろしい放射線電磁波がいくら通過しても全く問題がない放射線数値しか検出されていない証では、と素直に考えた。つまり、何を意図しているのかは知らないが、これは「高い、高い」と不安を煽る報道しているだけであり、明らかに現場で作業している実情を目の当たりにすれば、賢い人なら一目瞭然だろう。これも想像の域を出ないが、原発事故自体も放射線量も、当初から問題がなかったのでは、と今でも疑問に思う。それより、“メルトダウン”した原発を、たった9ヶ月で冷温停止させた作業員の技術力の素晴らしい心からエールを送りたい。いずれにせよ、この一連の原発報道はフニオチナイ。

私の性格上、正義と真実を求める調査士という立場に立脚すると、どうもフニオチナイ事がらの追及をしたくなる。こんなことを考えていた頃、昨年の5月に娘が孫を連れて帰郷した。暫くたったある日、突然、のどの痛みとともに喘息気味に陥ったので、アレルギー専門医に診てもらった。結果は「黄砂による喘息」だった。医者の話では、黄砂が日本中に蔓延し、それに含まれる放射能が、むしろ危険だという。つまり、黄砂にも放射能が含まれていて、これが悪さをしているのだ。こちらの話の方が、信憑性があるといいたい。これは推測の域を出ないが、神奈川県の茶畠での放射能騒ぎなどを含めて、原発の影響と思っていたのが、実は黄砂の放射能が原因なのかも知れない。そういうえば、1500m Svという天文学的数値を浴びていた一家がすこぶる元気だったという世田谷のラジウム騒動もそうだが、誰かが意図的に原発事故と結び付けたがっているのでは、とまたまた探偵ごっこをしたくなる。牧草の放射能汚染や、断続的に各地で高い放射線量の原因なども、ひょっとしたら黄砂が確信犯なら納得がいく。この解明をしない限り“除染”しても無駄だといえよう。黄砂の犯人はゴビ砂漠で極秘のうちに核実験をしているパンダ国なので、その事実関係を明らかにするには外交問題も辞さない覚悟が必要であろう。

パンダ国パンダといえば、パンダが上野動物園にお目見えして、はや39年が過ぎたが、当時、テレビではパンダ国希少動物として報道したので、誰も疑う余地もなかった。でもチベットの人聞くと、パンダはチベットのある限られた高山地帯でしか生息しないので、「紛れもなく私達チベットのパンダです」といったので、びっくりして文献をあさったが、これが正しいことが分かった。パンダ国がよその国のパンダを、自分のモノだと、高山から平地に移したものだから、今や絶滅危惧種に認定されもしているが、元の場所に戻せば解決するのに、今度はフランスへもパンダ国からやっぱりパンダは自分のモノだと偽ってチベット所有のパンダを貸し出しうる、という。この事実だけでも、日本人の多くはマスコミの“パンダ”プロパガンダに毒されてきたといえよう。もっとも、これは「自分のモノは自分のモノ、人のモノも自分のモノ」というパンダ国特有の倫理観とも

いえる。

さらに、放射線報道の別な弊害も起きている。それは「放射能はうつる」ということだ。日本の国務大臣が「お前に放射能をうつしてやる」といって、更迭された事件があつたが、呆れるばかりである。しかし、他人事ではない。この前、長野県松本市に行ったとき、駐車場に入るにも係員に「福島から来たのですが、放射能はうつりませんから駐車してもいいですか」とバカバカしいほどに気を使うありさま。それもそのはず、西の国では放射能がうつるから「福島の嫁はもらわない」という風評があるくらいだ。原発事故以来、何故か知らないが、放射能はうつると考えている日本人が増加の一途をたどっていることは事実のようだ。道徳教育を受けてきた我々60歳世代の御老体なら、「ばかなことを言うな」と一喝して終わるもの、今やゆとり教育世代となりつつあるので、「道徳」という二文字も死語となり、当たり前なことが当たり前でなくなったようだ。倫理の核心は、いわゆる“道徳”そのものである。道徳教育がなくなった教育現場の惨状は、そのまま日本国の惨状ではなかろうか。少なくとも国の文化や伝統、格式を守る源は、道徳教育を基本とする倫理観そのものであろう。そういう意味では、国民のもう一つの代弁者であるマスコミの倫理観の欠落はもはや限界線を越えている。この責任は重大である。

NHKの「坂の上の雲」がヒットした。司馬遼太郎さんは、「この小説を決して脚本し映像に流すのはしない」と遺言したという。なぜなら、「歴史は人の手によって夜つくられる」ではないが、映像化することで間違った歴史が造作され、不特定多数の人々に対して間違った歴史観を植え付けさせる危険性がある、として嫌ったという。でも、NHKが何年にもわたり遺族を説得して、「小説とおりに忠実にドラマ化します」という約束で、放映になったという。小説は、読む人との一对一の勝負だが、テレビはややするとプロパガンダの道具になり、間違った事実を、事実として伝える凶器と化す。それは、日本人が保有するたぐいまれな倫理観すら破壊する。

定時総会でしか唱和しない“倫理綱領”を、あらためて読んでみた。静かに咀嚼しながら。「調査士の前に、まず日本人であれ」という声がした。「このままでは国が滅びる」という声がした。「そろそろ目覚めろ」という声がした。あと何年務まるか分からぬ調査士人生を、まっとうな“日本人の誇り”とともに、率先して“品位”的保持に努めていく決意をあらたにした。

## 『ニレービ出演にまつり』

相双支部 新道 章

はじめに、数ある職業の中から、土地家屋調査士を番組の主役に選び、話すことの苦手な私から上手く話を引き出し、番組として成立させた NHK のクルー 3 人に感謝をしたいです

この番組出演をするに当たって、ただ若いだけの自分が本当に出演していいのか・・・経験もなく、行っていることが正しいかどうかいつも悩みながら業務を行っている私が、言わば土地家屋

調査士を代表してテレビに出演していいのか・・・この番組は、通常、若者が悩みながら業務を行い、どうにもいかないときに師匠の鶴の一声がきっかけになり、業務が完成に向かっていく。私は、未熟ながら独り立ちをしてしまい、業務を行うときは自らが判断している。一人で悩み業務を完成に向かわせている。間違ったことをやっても、自分が気付かなければ誰も軌道を修正してくれない。この危うさをテレビで放送し、全国の若者に、これが土地家屋調査士です、と胸を張って言えるのか。私が出演してよかったですのか今でも不安です。

ただ、出演したことにより、メール等にいろいろな方から、叱咤激励を頂きました。本当にありがとうございました。特に、全国の土地家屋調査士の先輩方から頂いた言葉に、自分はこのままではダメだなという思いがしました。自分の頭の中だけで完結しているような業務では、自己満足的な仕事になってしまっているのではないかと感じました。

仕事は、何のためにやっているのか。なぜ土地家屋調査士をやっているのか。この疑問は今まで何度もとなく頭をよぎりましたが、この取材を受け改めて考えさせられました。

実際、私は、不動産を営んでいる父の勧めでこの業界にいます。もし、この業界に入らなかつたら何をやっているのか想像もつきません。もともと、理想の職業があったわけではなかったので殊更に想像もつきません。ただ、今があることに感謝し、業務を行うべきなのだと思います。3月11日の震災が、そのように思わせているのかもしれません。あの日の震災、津波によってたくさんの方がなくなり、原発によってたくさんの方が避難を余儀なくされているのが現実です。

そのような現実が目の前にある時に、偶然私にテレビ出演の話が来て、そのテレビ出演により、全国の土地家屋調査士の先輩方から叱咤激励を頂き、今までの考えではいけないと感じるのは当たり前なのかもしれません、私はそのように感じ、これから的人生に繋げていこうと思いました。

この「あしたをつかめ」を見た若者が、土地家屋調査士を目指し、将来土地家屋調査士として社会に出る頃までには、私も成長し、真の一人前として業務に向き合っていけたらと思います。

### 4) 会員異動 (1/20 日時点)

#### ☆入会☆

9/29 郡山支部 鈴木 英範  
1/10 郡山支部 高橋 民衛  
手続中 福島支部 菊池 研

#### ☆退会☆

12/28 白河支部 安藤 宏幸  
合計会員数 294名 (手続き中含)

### 5) お知らせ

・ 本会職員の深堀さんがこのたび婚姻いたしました。新しい姓は渡辺さんとなりました。「より一層頑張ります」との事ですので皆様宜しくお願ひいたします。



### \*編集後記\*

今回は多くの記事を投稿していただき、内容豊富な会報となりました。記事を書いていただいた皆様に感謝申し上げます。震災・原発事故から10ヶ月余りが過ぎ、記事の内容も現実と向き合って前に進んでいく形になって来ていると感じました。本年も厳しい環境は続くと思いますが、土地家屋調査士として復興の一助になりたいです。

広報部長 菅井 隆邦